

令和 7 年 10 月 8 日
国立大学法人東京芸術大学
学長選考・監察会議

国立大学法人東京芸術大学長の令和 6 年度業績評価について

東京芸術大学学長選考・監察会議規則に基づき、令和 6 年度における国立大学法人東京芸術大学長の業務執行状況を確認し、評価を実施しましたので、下記のとおり公表します。

記

1. 学長氏名

日比野 克彦

2. 評価対象期間

令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日

3. 評価方法

業績評価は、(1) 就任時の所信表明に掲げる項目の進捗状況、(2) 中期目標・中期計画の進捗状況、(3) 特筆すべき事項についての進捗状況、(4) 意思決定プロセスなどの適確性、の 4 項目について、学長から提出のあった業務実績報告書及び学長本人へのヒアリングにより行った。また、監事、役員、部局長及びその他教職員からの意見聴取及び監事による監査結果並びに令和 6 年度自己点検・評価等も参考とした。

4. 評価結果

学長の業務は概ね順調に遂行されていると判断する。

(内容)

学長の卓越したリーダーシップと実行力、外部への発信力は極めて高く評価できる。特に、「コミュニティとしての藝大」や「共生・共創プラットフォーム」といったビジョンのもと、「芸術未来研究場」における企業、地方自治体、地域社会との連携や「アート×ビジネス」の新設等、学外との協働・連携が進展し先進的な取組が創出されたことは大きな成果である。これらの取組みは、大学と社会との接点の強化により本学の社会的役割と価値を大きく拡張し、本学が第 4 期中期目標に掲げる「芸術の力による、または、芸術と異分野との融合による、社会課題の解決」を推進したものであり、大いに評価できる。また、外部資金獲得のための体制整備といった財政基盤強化に取り組んだ点も評価できる。

一方で、大学の財政的な課題が依然として深刻であること、そして学長個人としての強力なリーダーシップに依存するあまり、学内全体への情報共有や共通理解の形成が不十分であるという課題が顕在化している。これらの所見は、今後の大学運営における重要な論点として浮き彫りになっていることから、学長の補佐体制及びマネジメント体制のさらなる強化、学内コミュニケーションの充実、財政状況改善に対する重点的な取組等が望まれる。

また、従来本学が取り組んできた教育研究及び築いてきた歴史や価値を継承しつつ、新しい時代に対応した教育研究を推進していくことを期待する。

以上